

もっと知りたいイタリア

EXCELLENT

ITALY

エクセレント イタリア・ベッラ イタリア

BELLA

VOL.5

Italia

食は文化をつくる

「美の創造者」たち

ゲーテ イタリア紀行を辿る
人は、なぜ旅をするのか

「時」が止まった町

ミステリアス 洞窟のマテーラ

つかりした長期熟成のワインだ。
人口3,000人の小さな村「バリーレ」。
この村の5軒の農家が集まり共同で経営
する「コーペラティブ」という共同組合
のワインセラーがある。

ワインを製品として高値で市場に出す
には、組織や企業の規模が大きくなけれ
ばならない。少量高品質のブドウを生産
する小規模農家は、一つの組合としてま
とまることにより、大規模農家と競合が
出来るのだ。

「農家が持ち込むブドウの品質が良けれ
ば良いほど高い価格で取引されます。そ
れは同時に農家が高品質なブドウ栽培を
目指すことにもなります」

小規模農家の生き残りにはワインだけ
に限らず、野菜やフルーツなどの農産物
全てにおいて高品質の生産に努めること
なのだ。

バジリカータ州の ワインをプロモーション



パオロ・モントローネ
ヴェノーサ・エノテカ社長

バジリカータ州のワインを広めるた
めに、ヴェノーザに2014年「エノテカ」
がオープンした。ワイナリーが比較的
少ないバジリカータ州は、まだワイン
の知名度が高くなく、プロモーション
展開のためにエノテカが必要とされた
のだ。

「バジリカータ州にはD.O.C認定ワイ

ンが4つあります。その中でもアリアニコのワインは最も重
要で、プロモーション展開に力を注いでいます」

「バローロ」や「キャンティ」などのワインは、早くからブ
ロモーションを展開し、その知名度は世界中に広がっている。
しかし、バジリカータ州はかなり出遅れた。近年、生産者が
品質を向上させるために活発な活動を見せていることから、
海外からの評価も高まっている。世界的に有名なアメリカの
ワイン批評家、ロバート・パーカー氏が「アリアニコ・デル・
ヴェルトゥレ」にバローロやキャンティなどの高品質ワインと
同じ評価をしたのだ。

「この地域は、火山の影響で土壌は火山質で粘土質が少なく、
ミネラルを含んだ砂状の土が非常に多いのです。それらの割
合がバランス良く保たれ、ブドウ栽培には最適なのです」

ブドウは生産される場所によって味が変わる。そしてワイ
ンは、その土地自体をそのまま表わすものだ。

プーリア州のワイン

バジリカータ州とは対照的に山岳部が
少ないプーリア州は、緩やかな丘陵や平
野部が多い。アドリア海やイオニア海に
面し、地中海性気候に恵まれた地域だ。
古くはギリシアへの通行路として栄えた
南イタリアの文化の中心であり、港も多
く海上輸送の拠点となっていた。現在で
もワインの海外輸出が盛んで「ヨーロッパ
ワインの酒蔵」とも呼ばれている。

州全域で産出されるワインの生産量は
シチリア、ヴェネトに並び、そのほとん
どはブレンド用として輸出されている。
しかし近年、州独自の個性的でユニーク
な良質ワインが開発されている。古代品
種の黒ブドウ「ウーヴァ・ディ・トロイ
ア種」は赤ワインやロゼに、白ワインも
「パンパヌート種」や「トレビアーノ種」

伝統的なワイン製法を受け継ぐ有機栽培農家5世代目のバスクアーレ
さんは1987年にD.O.C認定の有機ワインを生産。「自然を愛し尊重す
る愛は、神と自分自身を愛す」代々受け継ぐワイン作りに向かう心だ。



などの古代品種で造られている。代表的
なD.O.Cワインは「カステル・デル・
モンテ」。また「ロザート（ロゼ）」はイ
タリアの中で一番美しい色を持つワイ
ンだと評判だ。

19世紀から伝統的な製法でワイン造り
をしているワイナリーのファタローネ社
は、有機栽培によるワイン造りに力を注
いでいる。

「ブドウは100%有機栽培です。その
ブドウでワインを造り、エネルギーはソ
ーラーを設置し、自然エネルギーで電力
供給を行なっています。CO₂排出量は
ゼロ。100%持続可能なワイナリーと
して誇りを持っています」

バスクアーレ・ペルーラ社長は言う。

1987年にD.O.C認定の有機ワイ
ン「ファタローネ (Fatale)」を、1
993年にはグレコブドウを100%使
用した白ワイン「ビアンコ・スピノマリ
ーノ (Bianco Spinoamarino)」を生産。

これらのワインはニッチな市場をターゲ
ットとしたワインだ。

「土壌は50%が粘土質、50%が石灰岩
それに海岸地方のミネラルを多く含む岩
を細かく砕き、砂状にしてワイン畑の土
に使っています」

そのためだろうか、ブドウ畑から海の
塩の香りが漂って来るような気がする。

「有機栽培は体に良いだけでなく、ブド
ウ自らが免疫性を高め、虫や伝染病に打
ち勝つためでもあります。化学肥料に頼
らず自己防衛の術を学ぶ、その手助けを
私がするのです」

毎年一定の収穫量を上げるには、化学
肥料や殺虫剤を使えば簡単なことだ。し
かし、長期的に考えればブドウや土壌が
持つ免疫力を高めることが重要で、それ
によって強いブドウが栽培できると、ペ
トレーラさんは話す。

有機栽培には、ブドウ、そしてワイン
に対する愛と情熱と誇りが必要なのだ。